

9) 県内河川におけるアユ放流状況聞き取り調査結果概要

鈴木隆夫・氏家宗二

【目的】近年、全国的にアユの冷水病が問題になるとともに、湖産種苗の質の低下が言われている。このような状況の下、県内河川における病気の発生状況や釣獲状況等の実態把握を目的として、アユ放流状況の聞き取り調査を行った。

【方法】平成 13 年 11 月下旬から 12 月中旬にかけて、県内のアユを放流している河川組合に対して、アンケートを送付するとともに訪問および電話で聞き取りを行った。

【結果】

(1)放流種苗の種類：放流種苗には、仕立てアユ（業者に一時飼育された後河川に放流）とヤナアユ（河川への遡上アユを業者を経ずに直接河川へ放流）があるが、河川組合の7割が仕立てアユのみを放流していた(図 1)。また、ヤナと仕立て両方を放流しているのは2割、ヤナのみが1割あった。

(2)アユ放流後の歩留まり：アユ放流後の歩留まりについて、「普通～良い」と答えた割合は 56%だった(図 2)。しかし、「悪い」と答えた組合は 38%に上っており、歩留まりの向上は、依然としてアユ放流における課題となっている。

(3)歩留まりが「少し悪い～悪い原因」について：(2)の質問において、歩留まりが「少し悪い～悪い」と答えた組合に対し、その原因を尋ねたところ、「冷水病」と答えた組合は、13%（1組合）にとどまり、「川を下る」と「カワウ」が 25%(それぞれ 2 組合)であった(図 3)。その他の意見として「水不足」、「濁水」が挙げられていた。歩留まり低下の原因については、組合ごとに意見が異なった。

(4)釣獲結果：釣獲結果については、「普通～良い」と答えた組合が 57%あった(図 4)。全体的にみて、各項目の割合は歩留まりと似ており、歩留まりが釣獲結果に反映していると思われる。

(5)釣獲結果が「普通～良い」と答えた組合の入漁券販売枚数の増減：釣獲結果が悪くなくても 38%の組合で入漁券販売枚数は減少していた(図 5)。一方、釣獲結果の悪い組合で販売枚数が増加した組合がないことから、全体的に販売枚数は減少傾向にあり、組合経営は非常に厳しい状態にあると言える。

(6)組合経営の将来方針について：組合の経営方針については、基本的に3つの方向性(アユに力を入れる、マス類に力を入れる、両方ともバランスよく力を入れる)があるが、均等ではないもののほぼ3つに分かれた(図 6)。

これから力を入れるのはマス類という組合が最も多く 33%、次にアユとマス類両方が 28%、アユが 22%と最も低かった。アユは赤字だが組合員はアユを望んでいるという声はいくつか聞かれた。その他の中には、儲かることをする、組合解散かもしれないという声も聞かれた。

(7)アユ放流に関する問題点：アユ放流に関する問題点としては、「濁りがでる」、「カワウによる食害」、「水量低下」、「群れている」が発言中に挙げられた上位 4 つであった。漁場環境に対する問題点が最も多く(11 個)挙げられ、ついで「冷水病」、「奇形」等の種苗関係(7 個)、「客が来ない」といった社会的背景は 4 個と少なかった。

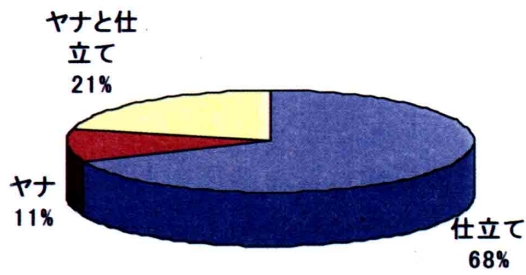


図1 放流種苗の種類

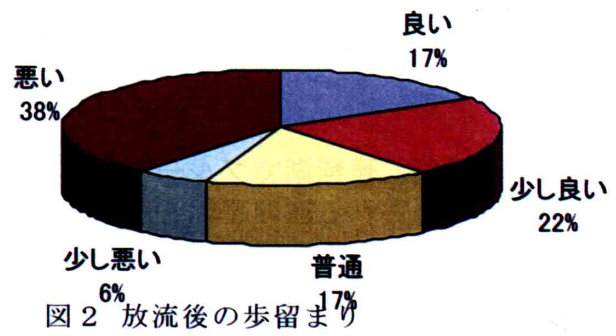


図2 放流後の歩留まり

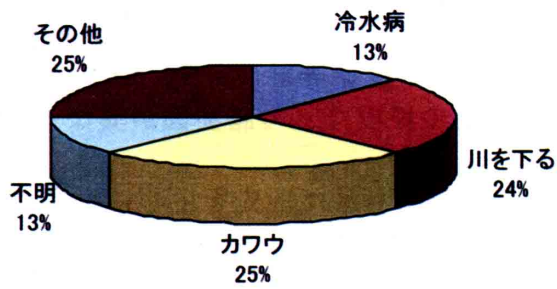


図3 歩留まりが「少し悪い～悪い原因」について

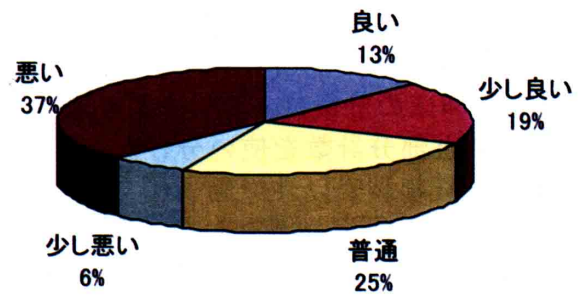


図4 釣獲結果

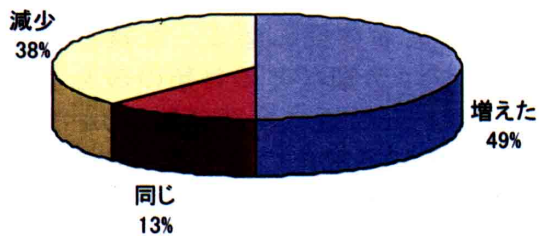


図5 釣獲結果が「普通～良い」と答えた組合の入漁券販売枚数の増減

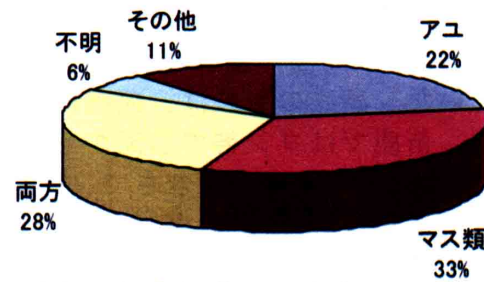


図6 組合経営の将来方針について